2221
540

市教之四必携乃仏道乃仏話 上

井上精軒著

木下書肆發行

特16
661

必携 布教者

御道の御話上

緒言

一本書は今だ天理教を聞く事浅き人を相手に天理教の御話を説きしものあり。

一故に、新らしき信徒諸君はこれを以て、天理教の教理の一部を伺ふを得べく。

一布教に盡力せる教師諸君は、これを以て御話の、參考とおすを得べし。

一是れ余等が信じて疑はざる所なり。

一本書說く所故參の信徒にとりて少許の遺憾なきを保せず、それ何ぞ事の大要のみを說きて、詳細を說かざる所ある、即ち之なり。

一之れ本書の主旨の然らしむる處にして、深く考ふる所あればなり、讀者乞ふ了せよ。

明治三十六年一月

編者誌

御道のはなし

目次

(一) 總話

本篇 (春山述)

第一章 (元の親さま) ……五頁

第二章 (かりもの) ……十八頁

第三章 (やまいのもと) ……三十二頁

次篇 (精水軒述)

第一席 (御神樂歌の解) ……秋山……三十八頁

第二席 (信神の話) ……春水……四十二頁

第三席（御神樂に就て）……如山……四十六頁
第四席（御道の要）……春山……四十九頁
第五席（御道の開祖）……春水……五十四頁
第六席（御神樂歌に就て）……春水……五十九頁
第七席（心の話）……春山……六十一頁
第八席（人の話）……如山……六十三頁
第九席（一口話）……秋山……六十六頁
結席（井上精軒）……六十九頁

目次（終）

御道のたはなし

偖て、天理教が、だん〳〵盛んになりまして、天理教を信仰なさる御方も余程多くなりました。が、然し、まだ天理教の事が、十分世間に分明つて居ませんから、天理教を惡く言ふ人も、余程多くあります

天理教を信仰なさる御方は、天理教の理由を知つて信仰なさるのでせうが。天理教を惡く言ふ御方は實際、天理教の結構なる事を知らぬからです。理由を知つて信仰するのは、人たるもの〻、誰しも、せねばならぬ事ですが、知らずに惡く言ふのは、余りよい事ではありませぬ。

物事は實際其れに當つて見なければ分りません。

善いと思ふた事も悪い事があり、悪いと思ふた事も、能く能く聞いて見ると、存外眞理の籠つた事があるものです、世には食はず嫌いと申して、甘味か不味か食ても見ずに、無暗に嫌ふ人が、よくあるものです、が、これは、大きな僻事であります。

天理教に就ても、矢張此食はず嫌いが、無いとも限りませぬ、否、隨分多くあるかと思ひます。

美味ありと雖も食はざれば其味を知る能はず、善教ありと雖も聞かざれば何ぞ其善悪を知らんや。人の評を聞いた斗りでは分りませぬ、物事は聞た上にも、能くしらべて、見なければ、なりません。始めて洋燈の流行しました時、誰れも使ひ馴れませんが爲に、種々の苦情を述べて、これを嫌ひました、油が臭くて鼻向けができぬとか、火事の憂いが多いとか、ホヤが破れて困るとか、神様

佛様が、お嫌ひなさるとか、種々雑多の悪口を申しました、が、だん〳〵使用馴れて見ますれば中々便利なもので、行燈や紙燭は頭底及びも、つきませぬ、處で追々使ふ人が殖えて今では至るところ、これを使はぬものはないようにありました。

凡ての事が皆これと同じ道理で始めの内は彼れ此れ申して居ましても、だん〳〵わかつて來ましたならば、又ほめねばならぬように、成つて來るものです。

どうか、ものゝこりちがいを、なさらぬように、ねがいます。

で私は、不及ながら天理教の御はなしの一つ二つを述べますから皆さんおしづかにおきゝ下され、否とつくと此書を繙き下されと、希望いたします。

しかし此處で一つ讀書に申して、否、斷つておかねばならぬの

は

實際此、天理教の深奥雄大なる御はなしは、吾々のような不及者が一朝一夕に述べつくす事、奥義まで説きつくす事は頭底出來かぬる事であります。更に後人の此書を訂正して以て世を益して下さらん事を一重に希望するのであります。

いで、御はなしを御きゝこり下されませ。

此書は天理教始めの御方に讀んでもらひたひ。

しかし教師諸君にも讀んで貰ひたく思ふ。

御道のれはなし（本篇）

口天謹述

第一席（元の親さま）

偖て、此吾々人間は如何ある處から出來ましたもので、ありませうか、大古の事跡は姑く措き現に此處に居ます處の吾々は卽ち如何なる處から出來ましたものでありますか、順序ですから之をまづ問ひましよう、皆さんは之に答へて、必ず、父母と言ふ、親があつて出來たものだと仰せられますでしよう

然らば其親は誰が造へましたのですか、勿論親も矢張親があつて出來たのであります

如斯して、だんゞゝ親の親の、その親の親といふように

元へ元へ尋ねましたならば、人間の一番先祖にかへりますであり
ませう、その、一番人間の元の親は誰でありませうか、何と言ふ
御方でありませうか
皆さん、人間の一番元を御存じですか、人間の一番先祖卽ち元は
如何なる處から出來ましたものでありませうか、人間の一番先祖
は何と言ふ御方でせう
此世界に元がなくて育つて居るものはありますまい
極めて近く比喩へて見ませう、草木を先づ御覽なさい、如何なる
草でも木でも、元と言ふ根があつてこそ、枝も葉も榮にるのです
根と言ふ元がありませいでは、育つて行く事はできません、と同
じ道理で、此世界にあるもの、何でも彼でも元がなくて育つて居
るものは一つもありません、人間もそのとほり、元と云ふ元があ

つてこそ、この世界に出て來る事ができましたので、元がなくて
どうして、此世界に、でゝきられませうや
皆さん、能く御考へ遊ばされませ、皆さん等も私も皆是元があつ
て出來たのでありませう、皆さん等や私の極近い元は卽ち其親で
親の元は親、其親の元も親、親の親の親の親の、ずーつと元の親
の一番元は何と言ふ、御方でありませうか、人間の一番元は如何
なる處から、出來たものでありませうか、人間力では頭底分明り
ませんでせうと思ひます、人間の元も分明らねば世界の元も、十
分分明つては居りません、今までは元と言ふ元が分りませんだ
から、世界一列は兄弟であるのに、それも分りません
世界兄弟と言ふ事が分りませんから、一寸した事から、互いに爭
いを起し、きりあいをし、ますます惡因緣をつみ重ねるばかりで

――こゝで一つ讀者へ注意しておく、此の爭ひきりあいは、――する事も成す事も、皆
眼を意味するにあらず、心のもつれあひを意味す

くるしみの種にあり、悪しき道を悪しき道へと迷ひ込むのは如何
も可愛そうなものである、そこで御神樂歌の發端に

よろずよの　せかい一れつ　みはらせど
　むねのはかりた　ものはない

どうもあはれなものである、どおんかげき遊ばされましたのであ
ります
天理教の御話と申しまするのは、世界の人間に、此の世の元を知
らしたい、この本元の道理を知つたならば人間が惡しき心を起す
事はあるまいとこの、神樣の思召によつて、始まりましたものであ
ります、で、我々が、勝手氣隨に、世界の話を引きづつて來て、

說く處の教へとは、違ひます。
又、御教祖樣が、自分勝手に御說き、なされた教へではありませ
ん
此世界に今迄に教へてない事をば、始めて我々に教へて下さるの
は、元、ない人間、ない世界を御拵らへ下されました處の、眞實
の元の親神樣、此世界、外に類のあるもないも、只、一柱の、世
界の親神樣であります。
該、親神樣が、世界を御覽遊ばされますのに、我々人間の爲る事
成す事、一向道の理に叶ふたものなく、皆自分の勝手氣儘なる、
心づかひをいたしまして、自分の心から、深き淵に、陷るような
有樣で、種々樣々の苦の本をこしらへ、難義苦勞するのを、親神
樣が見るに見かね遊ばして、如何ぞして、はやく、此人間たるも

――こゝで一つ讀者へ注意しておく、此の爭ひきりあいは、眼を意味するにあらず、心のもつれあひを意味す――する事も成す事も、皆くるしみの種にあり、悪しき道を悪しき道へと迷ひ込むのは如何も可愛そうなものである、そこで御神樂歌の發端に

よろずよの　せかい一れつ　みはらせど
　むねのはかりた　ものはない

ごうもあはれなものである、どおんかげき遊ばされましたのであります

天理教の御話ご申しまするのは、世界の人間に、此の世の元を知らしたい、この本元の道理を知つたならば人間が悪しき心を起す事はあるまいこの、神樣の思召によつて、始まりましたものであります、で、我々が、勝手氣隨に、世界の話を引きづつて來て、

說く處の教へこは、違ひます。

又、御教祖樣が、自分勝手に御說き、なされた教へではありません

此世界に今迄に教へてない事をば、始めて我々に教へて下さるのは、元、ない人間、ない世界を御拵らへ下されました處の、眞實の元の親神樣、此世界、外に類のあるもないも、只、一柱の、世界の親神樣であります。

該、親神樣が、世界を御覽遊ばされますのに、我々人間の爲る事成す事、一向道の理に叶ふたものなく、皆自分の勝手氣儘なる、心づかひをいたしまして、自分の心から、深き淵に、陷るような有樣で、種々樣々の苦の本をこしらへ、難義苦勞するのを、親神樣が見るに見かね遊ばして、如何ぞして、はやく、此人間たるも

の、心を、なをしてやりたいものである、我心からこて、難義苦労をするのは、可愛そうである、氣の毒なものであるこ思召しなされて居られましても、天に口なして、神樣は直に我々人間に、教へ下さるこ言ふ、わけにはまいりません、そこで人をして言はしむ、こ言へる如く、即ち、結構なる御心こ、有難き御靈を持つて、お居でなさる、御教祖樣の、御身体を、元々の因緣によつて神樣の御社こ定めて、早くから、御貰ひ受けに成つてあつたのでありまます。

然り乍らいろ〳〵の事情の爲に、その年限が次第々々に延びて來て、漸く神樣の御見定めもつき、此の世になき教を始めようこするには、唯、口で說く斗りでは何の役にもたちません。

此教を、弘むるには、何よりも、心が堅固でおければ半途で、事

を過つ樣になるものでありまます、ゆへに、第一其の、雜形手本こなるべきものが、肝腎でありまます、から。教祖樣にあらん限りの艱難苦勞をさせて、その心のたゆむか、たゆまぬかこ言ふ處を御驗し遊ばされました、けれども元よりの因緣にて、結構なる、御靈でありますから、聊かも難義苦勞こ思召さず、人を助けたいこ言ふ御心は一つも御撓みなさる事がありません。

そこで今ぞ、刻限が來たこて、親神樣が此れを見すまし遊ばされて何かよろずの道すじ、此世の本元の道理を教へたいこて、天降り教祖樣に御入り込み遊ばされ、御憑りになりましたのが、天保九年十月二十六日の夜中でありました。

されば、前にも申し述べました通り、天理教の御話は、眞實なる天の親神樣の御話でありまして、人間が勝手につくりだしました

御話こは違ひます。又、御教祖様は人間に御生れなされましてもその實は、神様の結構おある、御靈を御宿し込み遊ばされた、因縁なる御身体でありまするから、神様の御名代であつて、此世の人人をお助け下さる親様で、あります、けれども世界の人は、御教祖様の結構なる因縁の御方と知らずして、我々と同じ人間のように思ふから、教祖様の言はれる事も、なされる事も、皆、疑ふようになるのでありまして、實に勿体おいことであります、世間には、教祖様の事を疑ふ人が多いのであります。

草深い田舎に生れられた高の知れた女風情に、天の尊き、神様が何こて天降つて御憑りになる筈があらうか、果して神様が、此世界の人を教へ救ふ爲に天降つて教を説かせ給ふものならば、もつと立派で、學問もあり智識もあつて、身分の貴き人に、御憑りに

あるのが、理の當前であると言つて、疑ひ怨ぐる人がありますが此れは、此の世の本元の成り立ちの理をしらぬからです、此の世の始まつた時代には、華族もなく士族もなく、平民と言ふ名も定まつて居た譯でもありません。又、學問などのあつたのではありませぬ、又別に、智識の差別もあつたのではありません。

世の中の段々進歩するに從つて、社會を組み立て、其の治まり方の事情に依て、斯の如き種々の名稱が出來て同じ人間の中に階段のある樣に成たのでありますから、そうですから、華族でも士族でも其の一寸の名前こそ異ふて居て、身分の高き卑きに分れて居ますけれども、實は皆同等の人間、取りも直さず、皆神様の御造り下されました、神様の子供で、何にも、變つた事はないのであります。

一度裸体にして比べて見ましたならば、皆同じ六体の身体であります、華族だからと申して目が三つもあるのでもなく、又、手が四本あるのでもなければ、足が五本もあるのでもありません、士族だからと言て、耳が餘計にあるのでもなく頭が二つもあると言ふのでもなければ、辨者だからと申して口が三つも四つもあるのでもなし、平民だからとて、何處一つ不足な處があると言ふのでも御座いません。左樣な戯言らしい事は止めにしまして

要するに、此御道は心一つの道眞實一つの御道で御座いまして、智識が勝れてあるともうして、それで立派だと申す譯ではありません、昔からも、神は正直の首に宿る、と申してあります通り、神樣は、金のあるない、學問のあるない、身分の尊き卑きを仰せられるのではありません、神樣は眞の心が何より大切であると仰

せられるのであります。

そこで御教祖樣に神樣の御憑りにあるのは、御教祖のまことを神樣が御見こみなされて、ひろいせかいに人間は澤山在れども御教祖のような御方はもう一人おい、此心を神がひきうけて、此道を世界に弘めさしたならば、如何な助けでも出來ぬであるまいと、神樣が御見定めなされ、いろ〳〵と心を御試し成されました上、人間に自由に貸し與へてあつた年限の滿ちた日、卽ち天保九年十月二十六日に、始めて神樣が天降り遊ばされ、御教祖樣に御憑りになつて、此御道を御弘め始め、下されたのであります。

そこで今度は如何ある理由で今度の此神樣が人間、世界の親樣であるかと言ふ事を御話し致しませう。

此世界の元は暗黑なる泥海の世界でありまして、其中に二柱の神

様が御いでになりました。
其一柱の神様は國常立命様と申す御方でありまして、今一柱の神様は面足命様と申す御方であります。
此二柱の神様が、人間と言ふものを拵へて此世界、陽氣な世界を見て暮さうではないかとこの御相談が出來まして、偖てそれから、國狹土命、月夜見命、雲讀命、可志古根命、大食天命、大斗乃辨命、伊邪那岐命、伊邪那美命、の八柱の神様へ御たのみになりまして、手傳ひをして貰ふ事にし。
而して都合十柱の神様が人間を御造らへ下さる事になりました、受け持ちを御分ちになりまして
水の神様なる國常立命様は人間の身体にはうるおいの御守護下され世界におきましては、水一切を御つかさどり、下さる事になり

火の神様なる面足命様は人間の身体にてはぬくみの御守護下され世界では火一切を御つかさどり下さる事になりました。又此二柱の神様は八柱の神様の司どかつて人間を御拵へ下さる事になりました
さて國狹土命様は皮の御守護を成し下さる事になり、月夜見命様は骨を御受持下され、雲讀命様はのみくひ出入の事を、可志古根命様は息吹き分けもの言ひわけ聞きわけの事を、大食天命様はきる事を大斗乃辨の命様はひきのばしの事を、伊邪那岐命様はたねの御守護を伊邪那美命様はなわしろの御守護を、各自御受け持ちになりました
そうして漸く人間をこしらへてそれを伊邪那岐命様が、伊邪那美命様の体内へ御宿し込みになりまして、伊邪那美命様が此世に御

生みおろし下されましたのであります
そこで此十柱の神様は人間の親さま、つまり、(否、)世界の親神様
であります

第二席　（かりもの）

前にも申し述べました通り人間の本元の親は卽ち此神様でありま
す、こ申せば皆さんは此十柱の神様は、人間を御こしらへ下さる
こと、御守護下されましたばかりで、今では此神様の御守護はお
いのであらうこ御思ひなさるでありませうが、それは決して、左
様な事はない、此神様は昔も今も相不變、御守護下されますので

あります、今又くわしく申しませう。
此人間の身体は十柱の神様、卽ち親神様よりの借物であります如
斯申せば皆さんは、異様に御感じ成さるでありませうが、丁度此
人間の身体は借屋の如きものです
貸主は神様借主は人間、の卽ち心で、身体は其家こ言ふようなも
のであります
其何故にかりものであるかこ申しますれば
國常立命様は人間身の内に於ては、水氣うるをいの御守護を成し
下され
世界にては水一切を御つかさどり、御守護下さる神様であります
(人間身体の水氣の御守護も世界の水の御守護も此神様の成し下
さる處であります

若し一旦人間の身体に水氣の御守護がなくありましたならば如何でせう、

人間は片時も生きて居る事は出來ませぬ、

若し又水がなかつたならば如何でありませう、

實に水は世界の寶であると言はねばなりません）

面足命様は人間身体にては溫みの御守護を成し下され世界においては火一切の御守護を成し下さる神様であります

（人間の身体何處を障つて見ましても溫みがありますのも世界一切の火も、此神様の御守護であります

もし人間の身体に、溫氣の御守護がありませなんだなれば、人間は生きて居られません、

又世界でも同じ事此火の御守護がありませなんだ、ならば、ど

うもいたしかたがありませむ）

（以上二柱の神様が御守護下されますに依て人間の身の内ぬくみ五分と水氣五分と、五分々々と十分自由用に身体を使ふ事も出來、又世界も無事で、あるのでありまして、もし此、二柱の御中で一柱かりとも御守護が足りませんでしたならば、身の内では熱病が起り又冷へる病が起り世界では旱魃や洪水の絶へる間がありませんでありませう）次に

國狹土の命様は人間身体にては皮つなぎの御守護を成し下され、世界にては萬づつなぎの御守護を成し下さる神様であります

（人間の見苦しい處を皮でつゝんで下さるのもすべて皮の御守護をなし下さるのであります

もし此神様の御守が、おいようになりましたならば人間の身体

は實に見苦しいものであります
又世界では親子兄弟夫婦の縁は勿論金錢のつながも其他つなぎ
一切は此神様の御守護であります
もし此神様の御守護がなくおりましたならば、如何でありませう、申すまでもおいこゝであります)
月夜見命様は人間身の内にては、骨つゝばりの御守護を成し下され、世界にてはよろずつゝばりの御守護を成し下さる神様であります
(人間身体の(内の)骨の御守護を成し下さる神様であります
もし此神様が御守護下されませなんだならば
骨がありましても身体を自由に動かす事が出來ません、世間に此のためしは、たくさんあります

世界にては草木は勿論よろずつつばりの御守護を成し下さる神様であります
若し此御守護がありませんならば、家屋は崩れ草木は倒れ、申すまでもおい事ながら實に、たまつたものでは、ございませんでせう)
雲讀命様は人間身の内にては飲み食ひ出入の御守護を成し下され
世界にては水氣あげさげの御守護を成し下さる神様であります
(人間身の内ではのみくひでいりの御守護を成し下さる神様であります
もし此御守護がありませなんだならば如何でありませう、世上のためしがたくさんあります
世界にては水氣あげさげ卽ち雨や露や雪や霜等を降らして下さ

れ又地上の水氣を上げて下され
世上の便を御斗り下さる神樣であります
もし此神樣の御守護がありませなんだならば如何でありませう
私が申さして戴くまでもおく
皆さんの御考へのつく處でありませう）
惶根命樣は人間の身体にては息ふきわけ、もの言ひわけ、きゝわ
けの御守護を成し下され
世界にては風ふきわけの御守護を成し下さる神樣であります
（もし人間の身体に此神樣の御守護がありませんだならば、耳
があつてもきく事が出來ませず、口があつても、ものを言ふ事
が出來ませんのであります
世界におきましては風ふきわけの御守護を成し下さる神樣であ

ります、田や畑に、つく蟲も、風で吹き落されますのであります）
大食天命樣は人間身の内におきましては産屋のこき、親こ子この
體内の緣を御切り下さる神樣でありまして
世界にてはきる事一切の御守護を成し下さる神樣であります、
（人間身の内も又世界もきる事一切は、此神樣の御守護であります）
大斗乃辨命樣は人間身の内にては、おびやのこき、子ひきだしの
御守護をかし下さる神樣でありまして
世界にては草木たねものなどの芽の引き出しをば、はじめ、引き
出し引き延し一切の御守護下さる神樣であります
（人間身体にても世界にてもひき出し一切の御守護を成し下さる

神様であります）

伊邪那岐命様は人間の種の御守護を成し下さる神様であります

伊邪那美命様は人間の苗代の御守護を成し下さる神様であります

此二柱の神様は月日二柱の神様の御名代と成て人間を此世界に御生みおろし下されました神様で、ある事は已に皆さまの御承知の處であります、

以上述べました十柱の神様を總稱いたしまして

天理王命様と稱へ奉り日々禮拜さして戴いて居ますのであります

此神様が卽ち此天理教の奉教主神であります

先に述べました通り人間の身体は神様よりの借物であります、御一同様は私が如斯申しますれば、或は、

「此吾々の身体はかりもの〳〵なんのと、そんな事があるものか、

かりものならば自分の思ふようにならぬ筈である、けれども、かりものでない證據に自分の思ふようになるではないか、行こうと思へば行く事が出來、動こうと思へば動く事が、出來る、矢張かりものではない」と言ふ御方もありませうが、それは身上壯健な人の言ふ事でありまして、決して左樣な事はおいのであります。

依て茲に借物の證據を述べてみませう。

そも〳〵此世界に人間として生れて來たものに、どこに、長生を願はぬものがありませうか、無病を願はぬものがありませうか。

然るに今だ三十歳ならざるに思はぬ病の爲に黄泉の客となり、又は病氣の爲に喜しき日、一日も、通る事が出來ず、難義苦勞をして暮すのは、誰が好んでしますのでありませう。

かん、かたわ、おし、つんぼ、いざり、めくら、ちゆふぶ、らひ

びよう、かく、ろがい、肺病、胃病、をはじめとして、四百四病ごころか、八百八まいと言ふくらひな、たくさんな、いろいろの疾病、その疾病にかゝつて苦しんで居るのはだれが喜んでするのでありませう。

此世界に何が一番、つらいのでございませう。

四百四病のやまいより、貧ほど、つらい事はない、妻子と、大三十日に追はれに追はれて、朝は早く起き夜は遅くまで、寒さ暑さを厭はずに、したゝる汗を惜し氣もなく、せつせこかせき働らひて、漸く利けた僅かの金は夫婦と子供と一日に少さき箸にて、否、少さき口にて食ひ盡し、只殘るものは骨折つた、くたびれだけ、吁、貧よりつらひものはない、と、昔からは言てあるけれども、何程貧でも身体さへ、健者であれば、働らきさへすれば、何不自

由なしに、暮すことが、出來ます、それに引き替へ何ほどお金はありましても、病むほどつらい事はありません、お米は藏に山の如く、ありましても、かくや胃病ならば食べる事が出來ません、何程珍らしいものがありましてもたべる事もなりませず、又、盲人でしたならば見る事もできませず、花見に行きたくてもいざりならば行く事もできません、何程めづらしい事でも何程たのしき事でも、身体が不自由でしたならば、何が樂しき事がありませうか、何がうれしうございませうか、實に、病むほどつらい事は、世界に又どざいません

その疾病は誰がこしらへるのでありませうか、病のつらいのは誰しも同じ事であります、自分の身体あれば自分でそれを治せばよい事であります、自分の身体と言て居ましても治す事が出來ませ

んとして見ますと、矢張人間の身体は神様よりのかりものである事は、實にうたがう事の、出來ぬ事實であります。

然らば世界の草木鳥獸魚蟲などは人のものであるので、あらう、何故かと言へば、草でも木でも鳥でも獸でも魚でも蟲でも皆人間のものである、生かそうと殺そうと動かそうと人間のまゝである。

と言ふ人もありましよう。

けれども決して左樣な事はないのであります、如何なる故で人間のまゝでないかと言ふに、先づ草木を御覽なさい、草でも木でも人間がよくしようと思ふても枯れるやら、人がいやがる害草でも何度取り除いても生へるやらで、人のまゝにならず、何程人が追ふても、來て、乾してある麥を食ふ雀もあれば、人の頭上から糞を落す鳥もある、此つりばりにかゝれと言つても思ふように魚は

かゝらず、人の身体を食ひに來る蚤や蚊も居れば、藏してある砂糖を食ひに來る蟻もあり、箱類を損す虫もあります。

田畑をあらす獸もあれば、人の家屋をあらす鼠もあり人を嚙む狼の如きものもある。

矢張人間のまゝに成らねば人間のものではありません。

人間の身体は神樣よりのかりもの、世上世界のものも皆かりものであります、果して然らば人間のものは何でありましようか、此誰も好まぬ疾病は、だれが、こしらへるのでありませう、どうゆふ處から出來るのでありましようか。

第三席（やまいのもと）

前に申しましたこふり人間身上も、世界もみな神様よりのかりものでありまして、人間のものこ申しますのは心一つであります、心一つは神様より人間にあたへてあるこ、仰せられます心一つは人間のものでありまするから、如何なる事を思ふ事も出來ますのであります

今まではかりものこ言ふ事が、わかりませなんだから、其一つの心からほんぶ心こ言ふて八つの心得ちがいが、出ますのであります、其八つの心得ちがいを此御みちでは、八つのほこりこ申して御教祖様が説かせられたのであります、八

つのほこりこ申しまするはほしい。おしい。かわい。にくい。うらみ。はらだち。よく。こうまん。

この八つであります、しかし此八つの中にもよい方こ悪い方この二つの區別があります、こ言ふのはほしいこ申しましても、あたゑ（身上もあたへ、金錢もあたへ）があつてほしいは、ほこりになりません

なれども、あたへもなくしてほしいは、ほこりになります、おしいこ申しましても、しまつめのおしみはほこりになりません。なれども、だしおしみ、ほねおしみは、ほこりになります

かわいこ申しましても、ひともじぶんもへだてのない、かわいはほこりになりません。なれども、へだてをするのは、ほこりにな

ります
にくいと申しましても、つみをにくむはほこりになりません。お
れども人をにくむは、ほこりになります
うらみと申しましても、わが身わが心をうらんでこうるのは、ほ
こりにおりません。なれども、人をうらむのは、ほこりになりま
す
はらだちと申しましても、ものごとのりをたてゝはらをたてるの
は、ほこりになりません。なれども、かつてかんしやく、きま、
ごゝろは、ほこりになります
よくごもうしましても、りにかなうよくは、ほこりになりません
なれども、どんよく、ごうよくは、ほこりになります
こふまんごもうしましても、じぶんの知て居ることを、赤心から

人におしへてあげようと言ふような心は、ほこりにおりません。
なれども、たかぶる心は、ほこりになります
以上、述べました通り同じものでも二種の差別がありまゝて即ち
ほこりにならぬ方のは人のしあければならぬ處で、ほこりにある
方が即ち人間の病苦の原泉であります。
此世上に於ける幾百種の疾病は誰が製へるのでもありません、皆
自分から其れを求めるのであります、が、然し人間が自分から求
めて幾多の疾病に苦しむのは、好んでするのでありませうか、嫌
でするのでありませうか
誰も好んですること言ふような事はありません、嫌であるのであり
ますけれども、それを防ぐ事が出來ませんから、止むを得ぬ事で
あります、今度は即ち、病の元は心からと言ふ事を明かにして下

第三席（やまいのもと）

前に申しましたごふり人間身上も、世界もみな神様よりのかりものでありまして、人間のものと申しますのは心一つであります、心一つは神様より人間にあたへてあるこ、仰せられます心一つは人間のものでありまするから、如何なる事を思ふ事も出來ますのであります

今まではかりものこ言ふ事が、わかりませなんだから、其一つの心からほんぶ心こ言ふて八つの心得ちがいが、出ますのであります、其八つの心得ちがいを此御みちでは、八つのほこりこ申して御教祖様が説かせられたのであります、八

つのほこりこ申しまするは

ほしい。おしい。かわい。にくい。うらみ。はらだち。よく。こうまん。

この八つであります、しかし此八つの中にもよい方こ惡い方この二つの區別があります、こ言ふのは

ほしいこ申しましても、あたゑ（身上もあたへ、金錢もあたへ）

があつてほしいは、ほこりになりません

なれども、あたへもなくしてほしいは、ほこりになります、おしいこ申しましても、しまつめのおしみはほこりになりません。なれども、だしおしみ、ほねおしみは、ほこりになります

かわいこ申しましても、ひともじぶんもへだてのない、かわいはほこりになりません。おれども、へだてをするのは、ほこりにな

ります

にくいと申しましても、つみをにくむはほこりになりません。かれども人をにくむは、ほこりになります

うらみと申しましても、わが身わが心をうらんでこうるのは、ほこりにおりません。なれども、人をうらむのは、ほこりになります

はらだちと申しましても、ものごとのりをたてゝはらをたてるのは、ほこりになりません。なれども、かつてかんしやく、きまゝでゝろは、ほこりになります

よくこもうしましても、りにかなうよくは、ほこりになりません

なれども、どんよく、ごうよくは、ほこりになります

こふまんこもうしましても、じぶんの知て居ることを、赤心から

人におしへてあげようと言ふような心は、ほこりにおりません。

なれども、たかぶる心は、ほこりになります

以上、述べました通り同じものでも二種の差別がありまして即ちほこりにならぬ方のは人のしあければおらぬ處で、ほこりにおる方が即ち人間の病苦の原泉であります。

此世上に於ける幾百種の疾病は誰が製へるのでもありません、皆自分から其れを求めるのであります、が、然し人間が自分から求めて幾多の疾病に苦しむのは、好んでするのでありませうか、嫌でするのでありませうか

誰も好んですると言ふような事はありません、嫌であるのでありますけれども、それを防ぐ事が出來ませんから、止むを得ぬ事であります、今度は即ち、病の元は心からと言ふ事を明かにして下

されましたから、我々は始めて苦界から樂天界へ出る事が出來るのであります

病の元は心、心一つのもちかたに依て種々の病苦を受けるのであります

心さへ澄ましましたならば、我々は其日より實に結構な世界であります、これぞ即ち御教祖が御神樂歌に

やまひのすつきりねはぬける
こゝろはだんゝくいさみくる
よくにきりないごろみづや
こゝろすみきれごくらくや

ご言はれました處であります。

（右に申しましたのはあんまり詳細でありません、それは私が考へる處がありましたからです、そのおつもりで）

御道のねはなし　本編終

御道のはなし（次篇）

◎御話集

これからは、二三の教師の御話を集めましたものであります
から、中には同じ事を二度も言てある事も、おいではありま
すまい
そのおつもりで、御きゝ、否、御よみ下されたうございます

（編者白す）

第一席

（御神樂歌の解）

井上秋山

私は始めて皆様の御目にかゝりまして、
偖て、何を御話しさして戴きませうかと、暫し考へましたが、
これ、と言て御話し致す事が、ありません、で、今日は御神樂
歌について、所思を述べませうと思ひます
抑も、御かぐら歌は天理教の一大經典であります
教理も之に依て說き、教會も此教へに從て治めおければなりませ
ん
世間では往々此御歌の講義（……）をする人を見受けますが、そ
れは決して教理を悟り得た人ではありません
御神樂歌は、何程の意がこもつてあるとも、何程の理が、こもつ
てあるとも、頭底人間力で解する事は、出來ますまい、と思ひま
す

言ひかへれば、御神樂歌は、何人にも解せられると共に何人にも其意義を解する事は出來ません

分り易く言へば

御かぐら歌は一寸見たばかりでも、なるほどと言ふ事が出來ますけれども教理を深くきけば深くきゝますほど

御歌の眞實の意味が解しられまして、何時其深奥を解し終る事が出來るやら分りません、（しかし乍ら、如何しても分らぬと言ふのではありません）

故に私等の如きものは頭底御歌の講義など思ひもよらぬ事であります、が、私は茲に、始めての人の爲に、誤り易き一節二節を述べて、參考に供します

第一、誤り易きは、

九下り目の一ッであります

一せん二せんを一錢二錢卽ち金錢の事と思ふ人が往々ありますがそれは大誤であります、一洗二洗と解するのがあたりまへであります

一洗二洗、卽ち心を一洗二洗して、助けると言はれたのであります

亞て又人の疑ふ處は、御かぐら歌を假名ばかりで書いてありますから、何故漢字を交へぬのかと言て侮る人がありますが、それが又大きな誤違であります

此假名ばかりが大いに尊まるければならぬ處であります、理の深い意味の分らぬ處であります

多人數の中に菓子ようかんを出したと同じく人の尊ぶまねばなら

ぬ處であります

尚御歌の句讀について誤り易き處は澤山ありますけれども、それは又他日に讓る事として、今日はこれにて止める事ごします。

第二席（信神の話）

春水

抑も信神とは如何ゐる事を言ふのでありませうか。

朝起きるや先づ、顔と手とを洗ひ、神前佛前に三拜九拜し、又御飯が出來れば、初御飯とか言て、出來た飯を神前佛前に供へ、夕にゐれば燈明をあげて、手を拍ち珠數をならし、板をあげ御經を稱へて、これでよほどの信仰家だと思つて居りましたのは、今までの信仰であります

心の行ひの誤まつて居るのは、そこのけにしておいて、どーぞ家内安全無事長久に御守り下されと祈をあげて、これで、信神だと思つて居るのは、世間の多くの人の、習慣であつたようであります

偖て今度の此天理教は今まで無い道、今までに例のない教でありまして、今度の信神と申しまするは、今迄の所謂、信神とは違いまして、只、參るばかりや拜む計りや願ふばかり賴むばかりでは決して信神とは言はれません

神様の御道の御話を聞いて其御話の理（天理卽ち信の道）を守りて神様の御道に違はんよう神様の御心に背かんようにして通るのが眞實の信神でございます

御教祖様は御神樂歌の六下り目に於て、信神の道を示して、

なんぼしんぐしたとても
こゝろへちがいはならんぞへ
やつぱりしんぐせにやならん
こゝろへちがいはでなをしや
こゝまでしんぐしてからは
一つのこうをもみにやならぬ

と教へられました。

此、御歌の講義は恐れ多いに依ていたしませんが神信の道は、己れの心を眞實にすると同時に神様の御蔭を以て無

事に此世をつれて通つて戴くと言ふにあるのかと存じます。皆さまヨ。信神とは、肝要なる心の事は捨て置きて、只、家内の安全無事、我身の幸福を計り祈るのを言ふのではありません、心一つを神様は御受け取り下さるのであります、如何なる病氣災難も心一つの眞に依て助けてやらうと仰せられるので、決して神様は、銅の鳥居を造れども、金錢を供へねば助からぬ、あごと仰せられるのではありません

要するに心一つ、心一つの眞實を御受け取り下さるのであります皆さま、希はくば、虚僞の信神を止めて心を信にし、眞實の信神をして家内安全の道を御計り遊ばされませ、否、世界の爲を御計り遊ばされません。

第三席

（御神樂に就て）

如山

私は御神樂に付て所思を述べようと思ひます、不可ぬ處があれば、どーか教へて下されたい

何故に御神樂をつとめまするかと申しまするならば

御教祖が御神樂歌に於て示されました

いつまでしんぐしたとても

ようきづくめであるほどに

其他二三節を御讀みになつた御方は已に御分りでありませうけれ

時は寛政十年の四月十八日、大和山邊郡三味田村に前川正信氏の長女として御誕生遊ばされましたのが即ち

天理教御教祖中山みき子様であります。

抑も此世の親神様は、世界一れつを御覧なされ、人間の心の一つも誠の道に叶ふものなく皆勝手氣儘なる心の行ひを成し、自分の心から深き淵に陷る如きの有様にて、種々様々の苦しみの本を拵らへ、難義苦勞をして居るのを、見るに見かね遊ばして、早く人間の心を直してやりたいものである、早く救ふてやりたいと思召しなされて、時世を見計らうて、元の因縁なる結構な靈を此土に下らしめ給ひ、即ち、御教祖を前川氏の家に托して、此世へ生れさせ給ひましたのであります。

偖て此天理教は、今までに例のない道で、話一條の道、而も紋形

第三席

（御神樂に就て）

如山

私は御神樂に付て所思を述べようと思ひます、不可ぬ處があれば、どーか教へて下されたい

何故に御神樂をつとめまするかと申しまするならば御教祖が御神樂歌に於て示されました

いつまでしんぐしたとても
ようきづくめであるほどに

其他二三節を御讀みになつた御方は已に御分りでありませうけれ

欠

MISSING

時は寛政十年の四月十八日、大和山邊郡三味田村に前川正信氏の長女として御誕生遊ばされましたのが即ち天理教御教祖中山みき子様であります。

抑も此世の親神様は、世界一れつを御覧なされ、人間の心の一つも誠の道に叶ふものなく皆勝手氣儘なる心の行ひを成し、自分の心から深き淵に陷る如きの有様にて、種々様々の苦しみの本を拵らへ、難義苦労をして居るのを、見るに見かね遊ばして、早く人間の心を直してやりたいものである、早く救ふてやりたいと思召しなされて、時世を見計らうて、元の因縁なる結構お靈を此士に下らしめ給ひ、即ち、御教祖を前川氏の家に托して、此世へ生れさせ給ひましたのであります。

偖て此天理教は、今までに例のない道で、話一條の道、而も紋形

のない道でありまする故、説す處こ行ふ處こ別になつては道にな
りません、又話ばかりでは人が得心する事が出來ませんで、先づ
御教祖様にあらんかぎりの苦勞を盡させ、その心を充分に堅め、
人の雛形手本こ成して、然る後此御道を弘めさせかければ頭底成
功は覺束なしこ、そこで、御教祖様にいろ〳〵の苦勞艱難をさせ
られたのであります

御教祖様は十三才の御時、卽ち、文化七年九月十五日を以て。全
郡庄屋敷村の中山善兵衞氏に嫁せられました、此中山家の邸地こ
そ實に世界の元の因緣のある靈地でありますので、只今の御本部
こなつてある土地であります。

其後の御教祖様の眞實の行ひ、御道についての苦勞御艱難、其間
の種々の御逸話は中々我々が一朝一夕に述べ盡くすわけにはまい

りませぬ、御教祖様の漸く一人前の人こ成られる頃より九十歳の
高齡を保ちて明治二十年舊曆一月二十六日御逝去に成る迄の御一
代に於ける、世界の爲め道の爲めに御盡しあされた苦勞艱難こ言
ふものは、語るにも實に、涙の瀧の限りなき、忝けない次第であ
ります、其御艱難は如何なものでありましたらう、其万分の一も
申されません、或は人の子の爲に、晴雨百日間の跣詣の願を奈良
石上の神佛にかけ、我子二人の生命を天に捧げてまで、人の子を
助けたひこの心、御道を御弘め遊ばさるゝについて、或は人々に
狐こも狸こも言はれ、而も、警官より咎めを受けさせられて、う
たれもし、たゝかれもしつ、前後合せて二十余度の拘留に合ひ、
御老体を以て、荒席の上にも座られ、寒さ堪へ難き、冬の日に板
の間に座して、幾十日と言ふ日を過ごされました事もありました

早や此世に身のおきどころがかい、池へ身を投げようかしらん、首をくゝつて死おうかと、なされた日も澤山ありましたそうです

これは一寸御履歴の一部で、御教祖様の御艱難の數々御逸事の數數は申しあげますに時日を費やしますから今は略して申しあげませんが、前に述べました、要は、

我天理教の今日の盛大なる理由は、他なく、御教祖様積年の、堪苦忍難と眞心とにて成りたちましたのであります、と言ふ事の一寸一列のみをとりて御話しいたしましたのであります。

待たれよ、諸君が、面前に、眞正完全なる御教祖の面影を拜し得る事近きにある事を（余は信ず）

第六席

（御神樂歌に就て）

春水

私も御神樂歌について少し許り思ふ所を述べませうと思ひます少々卑近の弊のあるは致しかたこれなく、止むを得ぬ次第であります。

御神樂歌は御道の一大經典である事は、已に皆さんの御承知の處でありませうが、大方の人は今だ此御歌の大なる理由を御存知ないようであります、其理由とは別でもありません、

御神樂歌は御教祖に依て說かせられましたる、神樣の御教へであります、で、御道にとつては最も大切に、せなければならぬ理のあ

るものであります

然るに、世の未明の人は、あたりまへの、はやりうたのように思ひ、恐れ多くも事業をしながら歌つて居る人もあります（但し多くは知りませんが私は見た事があります）實に私は神様ご御教祖ご道ごに對し一時は大いに泣きました、けれども又思ひかへしました、こゝが神様の知らぬが無理ではないご仰せられる所であらう、ど、斯かる人は多くはありますまい、多くないのは喜こばしい所であります

可成此御歌は大切にしあければなりません、のは私が申すまでもない處であります、

又次には御本の事であります御歌の御本もなるべく大切にしあければなりません、又知らぬ御方は御本部や教會の月次祭の御神樂

を、眞似る人もありますが、これは神様に對し不敬の恐れがありますから、斷然止めにして頂きたひものであります、今日はこれで私も止めにしまして期を見て再び說く事にします。

厭におかしな事を言ひまして……。

第七席　（心の事）　春山

私は前に本篇に於て人間の身体はかりものであります

心一つは神様より下すつたものであるから人間のものであるご申しました、如斯申せば、心一つは人間のものであれば、人間の心の中で思ふ事は神様に分らん筈である、然るに心に思ふた計りで

神様より御咎めを受けると言ふのは何故であるかと申さるゝ御方も或はあるかも知れません、否、それは必然あるでありませうと思ひます、皆さん必らず誤解あさるな、心もつまり（人のまゝこは言ふものゝ）神様の御守護を受けずに働らかす事は出來ません神様の御守護に依て色々と心を働らかす事が出來るのであります以上の説に對し今だ信こせぬ人もありませう、が、能く御考へ遊ばされませ、身体のかりものと比較して御覽なさい、心も矢張、神様の御守護を受けつゝあるのは、疑ふべからざる事實であります

能く御考へ遊ばされませ、世間に狂人こなる人の多くありますのを、白痴者の往々ありまする事を、皆さまは常に見て居られる處でありませう

而して見れば矢張神様の御守護を受けつゝありまするのは實に疑ふ事は出來ぬのであります

皆さまよ、眞正なる教理を求めて、敢て誤解を成す勿れ。

第八席（人の話）

如山

抑も人こ言ふものは何を成すべく此世へ生れて來ましたものでありませうか、人のつこめとは如何なる事を言ふのでありませうか我々は何をして一生を終るべきものでありませうか、じつこ我身にとりて御考へ遊ばされませ、「あけましておめでこう」こ言ふ聲を口にし耳に〜ましたのは、考へれば昨日のようでありますが、

もはや一年を經ましたではありませんか、其一年の間に何をしましたか、吁、何事をしましたのですか、只、食べては寢ね食べては寢ね、同じ事を三百六十五度操り返したばかりであります、一晝夜二十四時間をば、寢る時間休息する時間食べる時間働らく時間の四つに割つて算して御覽なさい働らく時間は何程でありますか、其働らく時間には何をするのでありますか、働らくのは何の爲でありませうか、只に口を養ふ爲でありませうか、樂をばしたい爲でありませうか、金をためたひ爲でありませうか、何の爲に金錢をためたいのでありませうか、

然り口を養ふ爲である樂をしたい爲であります金錢をためたい爲で有ます。しかし乍ら、只に口を養ふ爲ではありますまい、口を養ふて何をするか、命をつなぐ爲である、生命をつないで何をし

ますか、只に樂をしたひ爲ではありますまい、樂をして何をするのですか。只に金錢を蓄へたひ爲ではありますまい、金錢を何の爲にするのですか

抑も人間は何の爲に生れて來ましたものでありませうか、人は何の爲に働らくのでありませうか、此一問題に解答し能ふものは果して誰でありませう、此問に答へるに如何なる言を以てすれば宜しいでありませう、か、それは諸君の胸にまかせておきませう、

が、皆さまよ、能く天理教の教理を胸におさめ、以て此「人は何の爲に生れて來たものであるか、人は何の爲に働くのであるか、」こ言ふ事を自ら胸に解し、而して生れた甲斐のある立派なる一生涯を送りなされよ。此問題に解答し得る迄、御教理を研究せられよ。

私は茲に、此、人間の務を説かせてもらはうと思つておりましたが、それはしばらく皆さまにお任せ申しておきまして、今日はこれにて止めておきます

又後日、期を見て再び説きます事もありませう

第九席（一口話）

秋山

天理王命さまご申しまする神様は、國常立命様面足命様國狹土命様月夜見命様雲讃命様惶根の命様大食天命様大斗乃辨命様伊邪那岐命伊邪那美命此十柱の神様を總稱し奉るのであります此神様が即ち我天理教の奉教主神であります。

世界の人間をこしらへ、世界にありこあるもの皆、御拵へ下され日々夜々に御守り下され、萬物の育つのも、皆、此神様の御蔭であります。

又、吾々日々、自由自在に叶ふ處、身体の内に、うるおいもありぬくみもあり、身体を包む皮の御守護もあり、しんなる骨の守護もふんばる事の出來るのも、飲食の出來るのも物のよく通じるのも息ふきわけ、言を言はしてもらうのも、又聲を聞く事の出來るのも、生れ出るのも死ぬるのも、だん〳〵成人をしてもらうのも人間の、種、苗代の御守護も皆此神様の御守護であります

人間身体は神様のかしもの、神様より借たものであります。

此神様の御守の一日缺けてもなりませんのであります。

されば、人間たるものは一日でも此御恩を忘れてはなりません、

2E-37

日々此御恩を忘れず、我身はどうなつてもかまわん人を助けねばならん、ご言ふ心を以て御恩報じを心にかけねばなりません。

御道のれはなし次篇終

布教者必携 御道の御話 上
井上 精軒 著

国立国会図書館

特

013895−000−1

特16−661

御道の御話（布教者必携）上

井上　精軒／著

M36

ABB−0120